

【実践報告】

インターンシップを通じて共生社会の あり方を考える

こどもミニフェスティバルの開催

白村 直也¹⁾，後藤 千絵²⁾，徳永 百合名²⁾

¹⁾ 岐阜大学教育推進・学生支援機構

²⁾ 一般社団法人サステイナブル・サポート

要旨

本論文は、2018年度「プロジェクト型インターンシップ」（後期15回の授業）での学生の取り組みを記したものである。

この課題解決型（PBL）のインターンシップでは、昨年度に引き続き、岐阜市で障害者の就労移行支援をしている、一般社団法人サステイナブル・サポートに受け入れ先をお願いした。取り組んだ課題は「障害者と健常者の相互理解を促す仕掛け作り」である。

グループ内で議論を重ねた結果、インターンシップを通じて学生が考案したのは、岐阜大学第一体育館での「こどもミニフェスティバル」の開催となった。輪投げやブラインドサッカーをはじめ、いろいろな遊びを通じて交流を深め、もって授業を履修する学生はもとより、こどもたちの障害に対する理解を深めることを目的とした。このフェスティバルを多くの人に知ってもらい、多くの人に参加を促す狙いから、SNSやチラシなどを使い、社会的な周知を目指した。

キーワード：インターンシップ，障害，学生企画，フェスティバル，小学生

1. 序

昨年度の「プロジェクト型インターンシップ¹⁾」では、岐阜市で障害者の就労移行支援に取り組む一般社団法人ノックス岐阜²⁾に受け入れをお願いし、障害者の就労移行の際に発生する経済的負担を軽減するにはどうしたら良いか、という課題に取り組んだ。その成果を白村と舩越、そして後藤は2018年に、「地域の特性を踏まえた持続可能な就労移行支援―誰もが安心して暮らせる地域社会を目指して」（岐阜大学教育推進・学生支援機構年報第4号、

以下年報と記す)と題する報告を行った。この経験を活かして本年度のプロジェクト型インターンシップ(学生9名)も、受け入れ先をノックス岐阜にお願いした次第である。

近年の障害者をめぐる法整備については、すでに「年報」冒頭に記したため割愛するが、めまぐるしく法整備される中で、とりわけ精神障害者の法定雇用率に着目し、昨年度私たちのグループが提案したのはスーツのレンタル事業であった。就職活動に必要なスーツのレンタルをすることで、経済的な負担の軽減が狙いであった。

2018年度後期の授業終了後は、外部から提供を受けたスーツをノックス岐阜に委譲し、事業の継続を依頼した。本年はその経験を踏まえ、障害者と健常者の相互理解を深めるためにはどうしたら良いかを考える運びとなった。このプロジェクト型インターンシップを履修した学生9名(教育、地域科学、工学、医学部から参加)には、初回のオリエンテーションが終わり次第、早速ノックス岐阜の後藤代表から「障害者と健常者の相互理解を促す仕掛け作り」が課題として投げかけられた。

障害者と健常者の相互理解を目指すこと自体は、何も今に始まった動きではない。ただ、2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されることにより、この動きが加速しているように思われる。文部科学省は平成29年度実施事業として、「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」に8,533万円を計上した。これはオリンピック・パラリンピックをにらんでのことと推察される。この事業の説明をした文書には次のように記されている。

「障害者権利条約の批准や改正障害者基本法の趣旨等から共生社会の実現のために障害者理解の推進が求められているところであり、障害のあるこどもと障害のないこどもの交流及び共同学習の推進が必要である。また、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を契機としたユニバーサルデザイン2020の中間とりまとめにおいては、障害者理解(心のバリアフリー)の重要性が示されており、障害のあるこどもと障害のないこどもの交流及び共同学習を進めることで、障害者理解(心のバリアフリー)を推進し、共生社会の実現を目指す³⁾。」

障害者理解を推進する上で、「交流及び共同学習⁴⁾」が必要であるという。この「交流及び共同学習」については様々な取り組みがなされているが、本活動もそうした取り組みを参考に進めてきた。

2. プロジェクト型インターンシップ開始に先立って

この授業は授業名を「プロジェクト型インターンシップ」としている(担当は筆者を含め教員4名)。シラバスには授業概要として「岐阜県内の企業や自治体等から課題の提示を受けて、グループで解決策を検討し、実際に提案を実施」と記してある。そのためには、フィ

ールドワークや文献調査、そしてインターネットでの情報収集が求められ、そうしたものを踏まえて、学生1人1人が課題の解決に資する意見やアイデアを出し合い、ディスカッションを繰り返す中で、学生ならではのアイデアを丁寧に練り上げていく、という授業の流れを紹介した。また、「そのアイデアを自治体や企業の担当者の前でプレゼンさせてもらい、直接にコメントを頂く機会を設ける」旨も記し、履修者を募った。

この授業を行うにあたり、事前にインターンシップの受け入れ先を確保する必要があるが、今年度はノックス岐阜以外にも、本巣市に2グループの受け入れをお願いした。結果として履修学生は計22名であった。

3. 授業内容とこどもミニフェスティバルの開催

授業内容について

次に授業内容について触れたい。後期15回の授業は次の表に示すように進んでいった。

表1. 後期15回の授業の内容

回数	内 容
1	オリエンテーション, アイスブレイク
2	ノックス岐阜レクチャー(後藤代表)「ノックス岐阜の取り組み」
3	岐阜大学サポートルームレクチャー 「日本における障害者」
4	世界の障害者事情レクチャー(白村)「ロシア, 海外の障害者は今」
5	外国の障害者事情を知る①(グループワーク)
6	外国の障害者事情を知る②(グループワーク)
7	中間発表準備
8	中間発表(グループ別)
9	取り組む課題の発表
10	グループ分けグループディスカッションと課題解決の提案
11	イベント開催決定, 準備開始。スケジュールと役割分担など
12	イベント開催, 学内成果発表会に向けた準備①
13	イベント開催, 学内成果発表会に向けた準備②
14	イベント開催, 学内成果発表会に向けた準備③
15	学内成果発表会

1回目の授業ではオリエンテーションを行い、授業履修者全員に授業内容や成績の評価方法などを説明した。その後グループ担当の教員がそれぞれの受け入れ先を説明(特徴やおおよその取り組み内容)し、履修者の希望に基づきグループ分けを行った。



図 1. インターンシップの光景（2018 年 12 月 26 日）

2 回目以降は、それぞれのグループごとに分かれて、活動を行う流れとなった。ノックス岐阜グループでは、初めて「障害」について考える学生も多くいたため、事業所の取り組みや、そこに通所する生徒の様子、また障害者に接する時に配慮事項など、インターンシップの事前学習に相当する導入部を後藤代表からレクチャーしていただいた。

後藤代表からレクチャーを受けた後は、海外での障害者の状況や、どのような政策が採用されているのかを説明。そして筆者が海外の障害者事情のレクチャーを行った。

その後はグループごとに興味のある国（ヨーロッパ、アジア、アメリカ・カナダから 1 カ国）を選び、その国の障害者事情を調べるグループワークを実施。統計担当、政策担当、社会団体担当など、グループで役割を分担して中間発表に備えた。他国の事情を知ることによって、今まで見えなかった日本の良い点・悪い点が見えてくる。



図 2. 中間発表会の様子

中間発表後に学生に出された課題は、「障害者と健常者の相互理解を促す仕掛け作り」である。序文で述べた通り、インターンシップを通じてグループ内で議論を重ねた結果、学生が考案したのは、岐阜大学第一体育館での「こどもミニフェスティバル」の開催であった。

こどもミニフェスティバルの開催に向けて

学生たちが考えた「こどもミニフェスティバル」の企画書には、「1. 普段家ではできない遊びや、科学的な実験をこどもたちに体験してもらう。2. 誰もが参加できるフェスティバルにして、障害に対して対しての偏見を払拭したい。」と開催の目的が書かれている。

企画書を作成する際には、何度もノックス岐阜に助言を仰いだ。電話やメール連絡の際にはあらかじめ「下書き」原稿を作成して、相手に失礼のないよう務める学生たちの姿は非常に好ましくあった。自分たちが取り組むべきことが決まってからは、学生同士の学び合いが日々加速していったように思う。

イベントの開催日時は、2019年3月16日(土)の午前9時から午後1時からに決定し、



図3. 学生が制作したこどもミニフェスティバル開催のチラシ

会場は岐阜大学第一体育館に決まった。グループ内のディスカッションで、フェスティバルではスライム作り、シャボン玉遊び、射的、ペットボトルボーリング、ブラインドサッカー、輪投げなどを実施することに決定した。

日時や場所、開催内容が決まった後は、すぐにチラシの作成に取りかかる。必要な道具を揃えるため資金は、ノックス岐阜にからの助言により、企業から協賛を募る

ことにした。協賛してくださる企業には、チラシへ社名やロゴを記載する。チラシは岐阜市内(岐阜大学近辺)の小学校や特別支援学校に電話連絡の上持参、校内に置かせてもらうことになった。申し込み方法は、チラシに記載したQRコードからインターネットで受付する方法を採用した。

イベント当日の様様

イベント前日の3月15日は、朝9時から夕方18時まで、学生皆で準備を進めた。天気予報では翌日の午前中が「雨」だったため、やや動揺したが、16日当日は運よく快晴だった。朝7時に集まり、第一体育館で準備を始めたものの、想像以上に時間がかかり、準備ができたのは開場時間の9時ぎりぎりとなってしまった。開場と同時に、多くの小学生が会場に詰めかけてくれた。



図4. 受付の様子



図5. スライム作り



図6. 紙飛行機作り



図 7. 射的遊び



図 7. 輪投げ遊び

4. おわりに

最後に、今回の活動を振り返ってみたい。まず、自分たちでフェスティバルを開催しようと思い立った学生の意気込みを評価したいと思う。また、このイベントを開催するにあたり、当初2つの目的が掲げられていた。繰り返しになるが、それは、1. 普段家では出来ない遊びや科学的な実験をこども自ら体験してもらう、2. 誰もが参加出来るフェスティバルにして障害を持っている人も持っていない人も参加することにより、障害を持っている人に対して持っている個々の偏見を払拭したい、であった。1については上に挙げたような問題があったものの普段家では出来ない遊びや科学的な実験を多くの子どもに体験してもらえたと思う。ただ、2についてはどうか。子どもそれぞれに偏見があるかどうかは問題だが、もし偏見を持っていたとしてもこのイベントを通じてどの程度払拭できたかは定かではない。ただ、障害のあるなしに関わらず子ども皆が一緒に遊ぶ中で相互理解を深める機会は今後継続して持つことが重要となってくるは間違いないのだろう。

イベントの準備を進める学生を見る中でノックス岐阜の徳永支援員は、「当初、イベントの開催が提案されたところで、当法人の後藤から、障害者のおむつを変えるスペースや、福祉車両でも止められる駐車スペースの確保、障害があっても楽しむことのできるコンテンツの考案など、多岐に渡る条件、課題が出された。どれを聞いても、福祉関係者であれば当然のごとく受け入れることである。しかし、驚いたのは、学生たちもそんな条件、課題に対し、全てすんなりと受け入れていたことだった。「そこまでの意味はあるのか」「実際に来ると分かってから用意してもいいのではないか」など、疑問が生じて仕方がないと思う条件もある。しかし、そのような意見は出ず、「では何が必要か」「何から手をつけるか」と、前向きな議論が始まったのが印象的だった。」と振り返る。またイベント終了後、ノックス岐阜の後藤代表は次のような感想を述べられた。

「今回、障害児もイベントに参加がしやすいよう配慮されたことで、障害児も健常児も安心して一緒に楽しめる貴重な機会となったのではないかと考える。健常児やそのご家族にも、何かしら感じてもらったことがあれば嬉しく思う。

インターンシップは非常に短い期間であったが、これから社会に出ていく学生が障害につ

いて知識を深め、ダイバーシティやインクルーシブな社会について考える一助となったなら、嬉しく思う。今後の人生の中で、思いもよらない挫折を経験することもあるだろう。そんな時に、「誰もが当たり前に分らなく生きることのできる社会」について思い出してもらえたら幸いである。」

また、会場全体を見渡す中で色々と気付くことはあった。とりわけイベントが進むにつれて学生を目線の高さが下がっていったことが印象的だった。9 時の開場から 13 時まで多くの小学生に遊びの説明をして一緒になって遊んだが、どの子どもにも、車椅子の障害児にも目線の高さを腰をかがめて合わせながら話をしていた。「障害」というキーワードに向き合う学生の姿勢を垣間見たように思う。この授業を通じて得たことや感じたことをこれからの学生生活に活かしていただいたい。最後に今回学生を受け入れてくださった一般社団法人サステナブル・サポートの皆様、そしてイベント開催に協賛して下さいました、放課後等デイサービス みーおんの森様、放課後等デイサービス ビリーブ様、児童デイサービス リハビリランド様には心からお礼申し上げます。

【注】

1) 「プロジェクト型インターンシップ」とは、文部科学省の産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業「中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化」により、2012 年度に岐阜大学が採択された教育プログラムである。2013 年度は約半年間、パイロットスタディとして PBL 型 (Project-Based Learning, チームで課題を解決する) の教育プログラムを実施し、2014 年度からは新たに全学共通教育でのキャリア形成科目「プロジェクト型インターンシップ」(以下 GULIP) として単位認定され、毎年実施されている半期の授業である。「長期インターンシップ」と銘打ってはいるが、このプログラムはインターンシップ先への継続的な通いを原則とせず、おおよそ後期の授業時間を利用して 3-5 日間程度、行政機関や民間企業での研修に従事させていただくものである。その過程で、受け入れ先の行政機関や企業より与えられた「課題」の解決に向けたグループワークを実施する。年明け 1 月に行政機関や企業のご担当をお招きし、最終発表 (プレゼン) を実施、そして課題に対する具体的提案を行うのが、このプロジェクト型インターンシップである。

2) 今回インターンシップの受け入れ先として依頼した、一般社団法人サステナブル・サポートは、就労移行支援事業所「ノックス岐阜」の運営を主軸に、岐阜県岐阜市において福祉事業を展開する法人である。就労に限らず、地域における障害者が抱える課題に対し、非営利団体として課題解決のアプローチを実践している。事業・活動内容については「年報」で一度触れたため詳しく述べることはしないが、ノックス岐阜では就業を希望する障害者向けの職業訓練・実習などを執り行っている。

3) 文部科学省「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解 (心のバリアフリー)

の推進事業」

[http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/006/h29/1410254.htm] (2019 年 5 月 25 日閲覧確認)

4) 筆者が知る限りでは、2004 年の障害者基本法の一部改正で「交流及び共同学習」という表現が初めて採用された。「共同学習」というのは「どの子も分け隔てなく共に学び育つ」ことを目指すものである。